

のりこえることが大切なのだ。」

四郎は、おじいさんのするどい目を思い出しました。遠い故郷の、津川の家で、背すじをのばしてみつめられたおじいさんの目を思い出しました。おじいさんは、会津の武士として、自分にかつたためにつとめてきたから、あんなにしつかりしているんだなあ、と思いました。

明治十七年（一八八四年）十九歳になった四郎は、会津藩のもと家老であった西郷頼母（このころは保科を名のっていた）の養子になり、その名を保科四郎とあらためました。

さらに、二十三歳になった明治二十一年（一八八八年）には、会津の古い名家である西郷の名をおこして、西郷四郎と名のるようになりました。

こうした間にも、四郎の柔道はどんどん上達していきました。入門して一年後には、先ばいの富田常次郎（講道館の最初の入門者）といっしょに、講道館